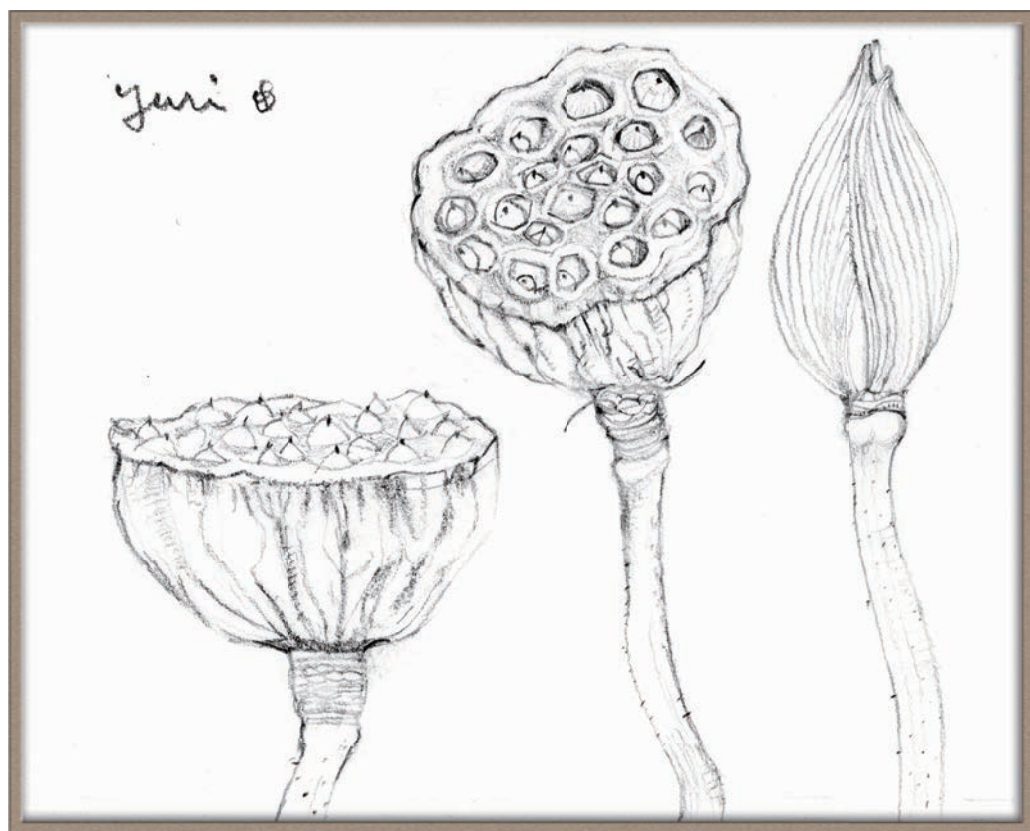


三河アララギ

平成三十一年 2019年

三月号

第六十六巻 第三号



ニューヨーク日記(149) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Breakfast in Nîmes

Blue Shoe Diaries



プロバンスで朝食！ 外のお庭に座ってのんびりと。この辺りでは何処へ行ってもジャムは自家製みたい。ここでは贅沢に5種類も出て来てももちろん全部試してみたよ。ローズ、イチジク、アプリコット、オレンジマーマレード、いちご。見るだけでも綺麗！ ん～暫くここに居たいな～サイレンや車の音の代わりに鳥の鳴き声や風に吹かれる葉の音が聞こえるんだよね。

Ah~ la vie est belle! Waking up in Nîmes to a beautiful provençal morning. Taking a lazy breakfast in the garden. It seems like most places in Provence make their own jam? These were deliciously made with fruit and flowers from near by. Rose, fig, apricot, orange marmalade (out of this world!), strawberry. I wish every morning was like this. Instead of hearing traffic, and alarms, you hear birds singing and the sound of leaves dancing in the wind. This should be normal!

目次

第六十六卷第三号(通卷七八三号)

表紙・蓮の花托

今泉 由利 (1)

ニューヨーク日記(149)

Blue Shoe (2)

アカンサスの徑

御津 磯夫 (4)

三河アララギ歌集

大須賀寿恵 (5)

歌集「續草々」

今泉 米子 (6)

三河アララギ歌集

尾藤 豪宗 (7)

小望月

岡本八千代 (8)

月の砂漠

弓谷 久子 (10)

蓮台

今泉 由利 (12)

短歌は

阿部 淑子 (13)

流星群

安藤 和代 (14)

南天

清澤 範子 (15)

まだ見えぬ春

伊藤 忠男 (16)

新年

森岡 陽子 (17)

誕生

白井 信昭 (18)

眼あたらし

杉浦恵美子 (19)

芽生え

山口千恵子 (20)

待ちあし春に

夏目 勝弘 (21)

『いとよせ』

いーはとぶ

山崎 俊子 (22)

三田美奈子 (22)

水野 絹子 (22)

牧原 規恵 (22)

稲吉 友江 (22)

現代学生百人一首

東洋大学

武部 美海 (24)

中村 優太 (24)

小笠原 咲 (24)

関 結月 (24)

高野弘太郎 (25)

眞島 幸音 (25)

長野 汐莉 (25)

野上 凌 (25)

森岡 陽子 (26)

高橋 育郎 (28)

山迫 京子 (30)

山元 正規 (30)

森岡 陽子 (30)

松本 周二 (31)

今泉 由利 (31)

田中 清秀 (31)

浜田 紀政 (32)

柳田 皓一 (32)

鈴木美耶子 (23)

吉見 幸子 (23)

牧原 正枝 (23)

石田 文子 (23)

森 厚子 (23)

かさね吟行会

『酔いの徒然』(83)

楽しい時間(76)

絹の話(100)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

「江上浩二の独り言」 本田 勇気 (42)

漢詩研修(二十九) 江上 浩二 (44)

芭蕉翁伝 平井 茂行 (46)

牧水ゆかりの地(1) 中屋 保之 (48)

萬葉秀歌の鑑賞 鈴木 孝雄 (50)

『歴代天皇御製歌』(九十七) 津之地直一 (52)

貫名海屋資料館 (54)

御津磯夫短歌鑑賞 鮫島 満 (56)

「水魚」のことから(218) 岡本八千代 (57)

編集室だより(二〇一九年一月)

今泉 由利 (58)

野菜・まんだら(13) (59)

「三河アララギ」について (60)

アンカンサスの徑

御 津 磯 夫

別るるは逢ひよりやすき嘆きさへ知らずすぎゆく越の國見に

ゆきゆきて倦くこともなし木の芽川木の芽峠の白き道標

向つ峯を西方とおもひ一夜寝て霧はれゆけり日のいつる山

醫王山いづくぞ横谷の峠のみち越ゆればこふるとなみ越中

犀川を名に呼び戀ひて五十年たまゆら来り石も拾はず

行きに見て歸りに忘る石のまに貴船菊咲きて垂れたるところ

冬の日の極まらむとして壁のうへ思はぬところにうすき日のかげ

亡きがらを納めし祠にさもらひて松は木垂るる土につくまで

蔓豆の祖先がへりを思はしめし黒き大豆のまどかさを言ふ

飛行して南半球より子は来たり寒き日本の新年に逢ふ

三河アララギ歌集

大須賀寿恵

両陛下ともに見給ひし護岸をも高潮はつひにのり越えて来ぬ

高潮に根さへあらはに洗はれし浜木綿の一つが青き芽を吹く

退職勧告受ける人らの入ひり来て関はりなき吾にも頭をさげる

四月には何處の学校に居るならむ転出希望の欄書き終へぬ

何故に口利かぬのが知りたくてカナリヤが卵を産みし話す

レ線写真の説明してゐる医師の顔が次第にぼやけて見えなくなりぬ

胸椎を病む吾を残して課員みなソフトボールの試合にゆきぬ

吾にも吾子と呼ぶべき幼なありて動物園の熊を見に来ぬ

御用納めの式が終れば未施行の書類も机にをさめて帰る

三日つづきの休み終りし事務室に水仙の花の水かへて居り

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

庭松の茂りにむかふ北の枝さくらのつぼみ綻びはじめ

カトマンズより帰れることを知らせ来ぬ光にゆるる山ざくらの花

庭の櫻にほへる部屋にひねもすを坐りゐましき二十五年忌

わが庭を覆へるさくらの花盛りあはれ私は花紛喘息

うぐひすの今朝なくこゑは櫻より満天星の花に移りたるらし

たちまちの葉ざくらのいろ庭山の夕べ明るき用心院碑

花冷えは冷えとして冷えながら葉ざくら暗きまひるまの雨

部屋ごとに庭の牡丹の花を挿す花華やかに音さへもなし

もやもやの烏の豌豆の休耕田あがるひばりを見たり聞きたり

いまだ見えぬ日向ひうがの友のえびね蘭いくいろにほふわが庭の山

三河アララギ歌集

尾 藤 豪 宗

荷として石の地蔵は下ろされぬはだれ残れる吾が庭のうへ

うつしみは土にならめと寺建つる願ひに吾は生をかけて来つ

易々とわれ妻子のまにま作務せずば一生の今を愉むと云はむ

この年の露霜ふればはろばろにロンドンの尼シレーダあはれ

つらぬきし吾と思はねば墨染のころも吹かれておくつきの前

ほとけの法事一つ演技してたはむれのごとすぎゆきを思ふ

百僧ともに吾も誦しちちの忌を解く香を炷きにけり

わがいのち七日はぐくみしははの日よ氷の下の水に手洗ふ

年々に五月はかかる香を炷く誰も知らねばなほつつしみて

夕かげりおしろい花に黄となるとき砂利簀かかへし妻が忍みかけて来る

小望月こもちづき

蒲郡 岡本八千代

寒かんの夜の思ひはきのふと同じこと独ひとりぼちのわがままにして

兎角とかくして君の一周忌をすませたり寒かんさむき風の音のさびしさ

老ゆらくの独くらしりの生活はじまりて一日ひと一日ひとの暮れてゆくなり

東京のむすめ豊明とよあけのむすめ来て三人の夜の姦かしましきかな

老いらくは老いらくらしきに生活くらししたしけふも八百屋へ何か買ひにゆく

「おらあおらでひとりえぐも」の本読みて真夜中三時の愉たのしかりけり

或る時は遺影のあなたを全くに意識せずして淡々としつつ

或る時は悄悄^{しやうしやう}として心くずれうなだれてゐるわたくしにして

わが庭も寒^{かん}の庭なり処々^{ところどころ}草草みじかき若草の色

いただきし牧水の歌のこの色紙「幾山河」を歌いつつ飾る

夫の友邱俊雄さんより夫を偲^{おも}ふ便りが届く泣けてくるなり

黄さんのご夫妻の手紙も届きたりたゞたゞわれに滲^{にじ}みくるもの

高山茶呑み交はしたるわれら四人いつしか十七年の歲月過ぎつつ

十三夜を小望月^{こもち}ともいふを知る君らとかの夜も小望月の夜

かの時の思ひ出は西浦の十三夜いや西浦の小望月の夜

月の砂漠

豊川 弓谷 久子

訪れし藤川の宿道の駅師走の風に小雪がまじる

忙しげに人の行き交ふ道の駅熱き紅茶を子を買ひくれる

今生れし初日余りに眩しくて目を閉じ念ず只平穩を

元旦を子の家に座すみさとの揚げし唐揚げうまし海老フライうまし

世に在らば亥年生れの年男軍人あがりの兄にてありき

思い出のこもりてゐれば捨て難しと和服リフォーム頼み行く人

若くして夫を亡くせし妹の一生思ひぬ今日三回忌

故郷の庭のままごと浮かび来る三つちがいの妹なりき

根元より枯菊すべて剪定す残り香かすかに漂ひゐたり

ジャケットに似合う柄なり半世紀前の着物を日向にて解く

週一度の世界遺産の番組を楽しみて待つ日曜日の夜

アラビアの月の砂漠が今写りをり世界遺産のテレビの中に

風静まりし大寒の空にくっきりとうかびてゐたりスーパームーン

月かくも美しきかと束の間を夜空仰ぎをり寒さ忘れて

買物に丁度手頃と喜ばれ今日もせつせと手提げ袋縫う

蓮台

東京 今泉 由利

上腕の筋肉痛のほのぼのと阿弥陀如来の蓮台造り

遮^{さえぎ}るは何物も無きごとくにて太陽光を両手に受くる

エアコンに温もる部屋のコーヒー木真冬の日々も新芽を伸ばし

妙高の高原に生えし露の臺味噌と交^{まじ}へて今朝の食卓

湯気たつるご飯に添へる露味噌よ妙高雄姿蘇^{よみがえ}りくる

新聞・テレビ・パソコン・スマートフォンこの世に生きるを認識しつつ

電線に止まる雀のふつくとこの寒の日々如何^{いかが}ゐますか

太陽を八分前にいでこしか八分毎を沢山沢山

朝餉してゐる時には晩餉かと地球の距離を測りつつ生く

幾粒かポケットにあり星の砂砂となりたる有孔虫よ

幾度か眼合^{まなこあ}わせりジンベイザメと彼の水槽離れ難しも

美ら国の陸と海と空との狭間青から緑へグラデーションは

日本の最南端の星を見む石垣島の闇に分け入る

星見石のむこう四百光年に散開星団スバルの見ゆる

三百五十人が住むといふ竹富島の続きこしこと続きゆくこと

短歌は

豊川 阿部 淑子

ポイントで購入かないし文化鍋何と重いか具材も入れぬに

百壽なる祝の札にと商品券娘の加勢で我耳に宝石

ベランダで首項垂れしポリアンサ指添え水やりみごとに生還

大坂の全豪Vを目ざす中心の乱れに打ち勝つ強さよ

毎月の歌稿しめ切り近づけば「短歌はできたの」夫は問いくる

流星群

豊川 安藤 和代

流星群見たしと庭にたたづめど寒さに負けて部屋に飛び込む

子等はみな反対だろう臓器移植考えている初春の庭

花ことば思いやりとふろう梅の春まだ浅き庭に咲き初む

今年だけと思えど孫の笑む顔に負けて今年も年玉わたす

高齢に負けてはおれぬ「さあ何を」やはり私は歌を詠みたし

五十余年悲喜こもごもを歌に詠み吾が人生に悔いの残らじ

立つ度に座るたびにもどっこいしょ聞こえているか山茶花は紅

成人を祝うが如く青き空孫の振り袖花が満開

四世代暮したあの日なつかしみ小さき卓に一輪をさす

新しき手帳求めてまず一番健康長寿とこの年も記す

南 天

春日井 清 澤 範 子

増築の南の窓より朝日射す赤き南天ますます赤く

南天に並ぶ椿に眼をこらす気配に鳥の飛び立ち行けり

老齡に日毎振るまひ小さくなる最善の気持は大きく持ちて

朝あさに庭を掃き寄す隣り家のもみじ葉柿の葉舞ひ落ちてくる

吾が好む山百合の咲く故郷を思ひ出しをり娘に語る

娘の手よろける吾の右に立ちさつと右手を握りて温し

結婚せず経理一筋暮しこし娘はわが手を支えてくれる

娘の手握り返せばまた握る親娘の絆しばし流れて

吾が夫と落葉踏みつつ歩く道堤防つたひは冬枯の風

雨戸締める夫は大きく吾を呼ぶ冬の半月夜空に見ゆる

まだ見えぬ春

大阪 伊藤 忠 男

雪雲に覆われ重き東空僅かに見える希望の切れ目

地震なき津波の恐さ昔知る南国ならず我が国のこと

朝日浴び山並み蒼く輝くも午後には日射し雲で閉ざさる

病室の窓には霜か朝露か朝日でゆがむ水玉模様

点滴の落つる速さに脈拍も呼応するなり目で追い続け

大阪の街にあふれる人模様白黒黄色とりどりの国

初春と言えど凍てつくこの年の冬はいつまでまだ先見えぬ

ストレスと言えば職場かさにあらずすることのなき時に及ばず

友と我れ手術回数競い合う無事なる彼を祝う嬉しさ

三回は我なり君は四回かまだまだ続く無事の祝いが

新年

東京 森岡陽子

総持寺で買い求めたる干支の箸新年迎へ速やかにおろす
暮れからの足の痛みは正月をただただじつと静かな暮し
友人や近所の人に助けられ足の痛みと心の痛み

二日の日まだ朝明けぬ六時には三日月に添ふ金星かがやく

穏やかな正月三日過ぎ行くもまだまだ痛む足の辛さよ

箱根路をたすき繋ぎ道駆ける見詰める先は雪の富士山

成田参詣長年続く行事成る先ず御参りし次は鰻屋へ

道端の紅色木瓜が咲き初むる枝には残りの枯れた実もつく

明神にダークスーツの会社員松が取れても混み合ふ神殿

水族館半年ぶりに水母見る昨日生れた十匹程の子

誕生

豊川 白井 信昭

文政期「伊能忠敬」なくなりぬ二〇〇年すぐ今にして知る
岸よりか沖合長くつきだしし水中州の姫島あたり

豊橋の神野新田堤防に六条潟の名いまに伝へり

港臨むここ埋立地戦時中海軍の大崎飛行場跡なりき

にはかにも空いと暗くかき曇り関ヶ原より雪はふりくる

元旦を少しばかりの祝い膳家族四人の団らん
よったり

六畳間猫の破りし障子戸の今日ようやくに紙貼りおえたり

打ち越して御堂の山の頂は夕日にそまる私もそまる

茜さす光まぶしく三河湾黄金に映ゆる今日の落日
こがね

わが娘の出産早まり昨夜遅く無事生まれたり皆安堵する
よべ あんど

まなこ
眼あたらし

蒲郡 杉浦恵美子

大切なものとは何ぞ我が身には人と心を通はすること

会ひたしと賀状に添書呉れし人嬉しくて直ぐ電話掛けたり

戴きし金柑数へて百個あり甘露煮にして愉しみ延ばさむ

金柑のころころ愛ほし洗ひつつ時々摘んで口に含みぬ

金柑の甘露煮醬油を一寸差しその飴色を飽かず眺むる

夫も居ぬ音なき世界に起きて居るこんな暮しも慣れた気がする

平成の終りだの政治経済だのガラス越しにて見てゐる心地

やれ嬉し眼鏡なくして書が読める取り戻したる術後の視力

書が読めるどんどん読める新品のレンズに替へし我が眼にて

まなこ
つれづれをなぐさむるべき書が読める我が身に唯一眼あたらし

芽生え

豊川 山口千恵子

ちらちらと降りぬし小雪止みたるか窓辺の楓の冬木鎮もる

粉抹茶まるごとカテキンの文字のあり体に良きかと思ひて飲みぬ

ふるさとより届きしみかんおいしかり山の畑に摘みしもはるか

袋ごと食べておいしきみかなり山の畑に働きし日々

南天を一枝加へしのみなりきわが活けてゐる正月の花

休耕の田に芽生え来し小麦の芽寒き風吹きみどりのゆるる

芽生え来し小麦のみどり春を待つ冬の冷たき風に耐へつつ

大根の緑葉茹でて食はむとすみどりの色良く茹で上がりたり

枯れ草の中より一つ二つ三つふっくら丸き蒔の臺とる

蒔の臺草の中よりとり集むズボンの裾に草の実つけて

待ちゐし春に

豊川 夏目勝弘

鬼も福も來ることもなく時間のままに二月三日の過ぎ去り行けり

立春は二月四日と曆にありぬ書齋の内は二十度を示す

庭なかの雑草は小さき緑の点されど芽生えを待ちゐるは無限

庭なかの冬日の当らぬ所には緑を保つ苔の一群

ネムノキの冬木となりし枝の間に親しみ覚ゆ金星の光り

金星の間近に一つ小さき星この朝氣付けば遠のきてをり

己が身体に始まる今日をお願いしつつ常なる時間に起き立ちにけり

己が命は己れで守ると食事を作る独りとなる日は必ずに來る

創造の瞬間こそが孤独とか諾なひながら孤独を楽しむ

部屋内に冬日の射しきぬ洗濯機を回せしことを思ひ出したり

『いっよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

日の名残り龍田の浜にいつまでもありつつ続く波音聞きをり
流れ星白長き尾に流れゆく私の願ひは今年も二つ

山崎 俊子

角つこの電信柱にシルバーカー立てかけてありもうすぐ日暮れ
形見とも思へる鉢にけふは植う冬日に咲ふ赤き^{あま}ベゴニア

三田 美奈子

はるばると稲武の紅葉訪ぬれば不意に口衝く「三河男児の歌」
我が子より「孫が可愛」と言ふ母と二人の昼餉あつあつの鍋

水野 絹子

わが畑の白水仙の多く咲きてほっと和める今年の年の瀬
今年また松とゆづり葉もらひ来て友にもあげる嬉しさのあり

牧原 規恵

貰ひたる泥つき里芋コトコトと薄味にして暮るる厨に
「縄跳びが十回できた」とわが幼五歳の瞳の今朝の輝き

稲吉 友江

稻生への坂の道辺にわれを呼ぶ今も呼び捨てよ男子同級生
ふたご座の流れ星かも一つ流るいつまでも見上ぐ今宵の夜空

鈴木美耶子

黒き実の白山吹を今日生けて華道展は京都高島屋にて
自づから今日の一日^{ひとひ}を楽しまむ北風ビュービュー縁側の外

吉見幸子

しばらくの流るる後のこの温さ使ひ続けて井戸のありがたさ
平成の最後の年の瀬NHK「戦艦武蔵の真実と最期」を

牧原正枝

来る年の星まつりあり無量寺に無難を願ひて祈りを託す
スマホにて辞書引く吾を佛壇の夫は眉間にしわ寄せて見るか

石田文子

空青しブルーブリッジから眺むれば早や堤には数多の鷗が
雲間より今宵十六夜の月の出て明るく光る聖夜は近し

森厚子

現代学生百人一首

東洋大学

覚えてる偉人は全てゲーム内個性が強くて面白いキャラ

鎌倉女学院高等学校三年（神奈川県）

武部美海たけべみうみ

この時代生きた心地がしないのだなにをするにも指先ひとつ

神奈川大学附属高等学校一年（神奈川県）

中村優太

電車内本を立ち読みする人がいるとなんだかほっとするんだ

中央大学附属横浜高等学校二年（神奈川県）

小笠原咲おさき

制服で皆に紛れているけれどなないろのぞう描いてみたい

中央大学附属横浜高等学校二年（神奈川県）

関結月せきゆづき

夕立に蝉の声がとけこんで夏の青田にしみこんでゆく

新潟県立燕中学教育学校二年 高野 弘太郎

「生きている」そう言うように道端に転がる蝉が一声上げた

新潟県国際情報高等学校二年 眞島 幸音

育てた子牛を出荷せりに出す母に聞かすとドナドナ歌う

新潟県立長岡農業高等学校三年 長野 汐莉

Jアラート鳴った朝でも教室であくびしている僕らの未来

東京学館新潟高等学校一年 野上 凌

贈呈誌

森岡陽子

榲の木（最終号）静岡県アララギ会

- | | |
|---|--------|
| ○君がたびし茶の実を垣に植ゑおほし採みて飲む日をいつとか待たむ | 土屋 文明 |
| ○火を焚きし跡の残れる石原に夕べ沖より寄する霧見ゆ | 落合京太郎 |
| ○わが伊豆の大瀬の岬に生ひ茂るネズの大木榲の木なり | 佐々木美智子 |
| ○かくれんぼしながら下校する子供達一人がわが庭先に身を低くゐる | 漆畑八江子 |
| ○ぼそぼそと桑の葉蚕の食むに似る静かな夜更の梅雨の雨音 | 田中とき |
| ○こちらへとわが掴 ^{つか} む手に燕のおとなしくして温かかりき | 中村弘武 |
| ○雨上り澄みし夜空の八日月バケツの水に映りてゆらく | 末次泰子 |
| ○葉の色の稚きバツタ草を引く我の先へと飛びてゆきたり | 吉田令子 |

○雑草が主役のごとき我が庭に芝も負けじと雨に活き活き

鈴木恵美子

鹿兒島アララギ 1月号

○芋餅を美味しと言ひて御代りと児等は寄り来る遠慮がちに

森枝むつ美

○満潮の川口にただよふ葛の枯葉潮にゆだねて流れゆきたり

浜畑松枝

○渡りの途中差羽さしばの群れは佐多岬の樹々の梢に風を待ちをり

江藤金博

冬雷二〇一七作品年鑑十自選合同歌集

○夕はやく温泉街に灯のともり浴衣の人らほのぼの行き交ふ

森藤ふみ

○土の上ところがしころがし黄の色濃き金柑を突く鶉

青木初子

○雨水の日にひひな飾ると良いと聞く蔵より出して飾るに半日

小川照子

笑顔のワルツ

高橋育郎 作詞

笑顔の花が 一輪咲いた

その花見た人 笑顔になった

それから次へと 笑顔の花は

広がって 輪になって

いつか大きな花園になった

音楽が風に舞って流れ行き

3拍子の ワルツを奏でる

人々は嬉々として踊り

地上の楽園になった

たった一つの笑顔の花が

まわりの人を引き寄せながら

笑顔の花をまた咲かす

たった一輪の笑顔の輝き

その力を知りましょう

天からも 地からも

鳴り響く音楽はワルツ

人々は輪になって踊り

この世の楽園になった

笑顔のワルツ

喜びのワルツ

『俳句』

春隣固く閉ざしし神輿蔵

山元正規

色づきし蕾の数や宮の梅

水仙の二叢群るる孔子廟

鳥居ぬけかをる甘酒空つ風

森岡陽子

紅梅の咲き初む青き空広し

朝餉終ふ薬忘るる春近し

オカリナ之音の掠れや枯葎

松本周二

夜間飛行橋の形の冬灯

冬晴れやみなどみらいはクリスタル

冬夕焼け振り向く空の大き月

田 中 清 秀

冬尽きて石灯籠の去年の苔

老松の風音清し春隣

青に染む秩父連山初景色

浜 田 紀 政

壁打ちの音の聞ゆる春隣

裸木の真っ直ぐ延びる道静か

真夜中の天辺の月春隣

柳 田 皓 一

登り詰む寒紅梅の大樹あり

夕間暮さざなみが立つ冬の池

庭に来て何啄むや初雀

重野善恵

実千両こぼして逃げる小鳥かな

日本平朝日耀ふ雪の富士

富士山の影を正して初明り

山迫京子

区分され四ヶ国語の初みくじ

手袋をベンチに忘る春隣

飛行機の小さき窓より年始め

今泉由利

読谷のつむぎ上布や機始め

お飾かざりにカトレアまじる沖縄や

小春日や老婆三人立話

植村公女

一生の一日を生き日向ぼこ

大鳥居くぐりて仰ぐ初御空

初場所やラヂヲ中継聞きとれず

今泉如雲

風の無き城下の町や初岩木

溶岩でできし山とや深雪晴

春光や磨きあげたる英虞の海

杉浦弘

まんさくの山を囃して鳴る瀬音

春宵の重たき眼鏡はづしけり

かさね吟行会

「神田明神初詣」 一月

田中 清 秀

「江戸っ子は五月の鯉の吹き流し口先ばかりではらわたはなし」と川柳に読まれるような江戸っ子気質（かたぎ）は「粹」とか「いなせ」という言葉で表されてる。「てやんでい」「べらぼうめえ」なども親しみのある江戸弁である。その典型は一心太助であり熊さん、八つつあんであろう。そして神田明神の信者であり、親子三代にわたって江戸下町に生まれ暮らした町人が江戸っ子の本家本元らしい。今回のかさね会はその江戸っ子ゆかりの神田明神に初詣を兼ねて吟行した。

神田明神は正式には神田神社で三百年の歴史を持つ江戸の総鎮守であり、将軍家から庶民まで守護し続けてきた。一之宮は大黒様、二之宮は恵比寿様、三之宮は平将門命である。参拝の前に、先ず大鳥居前にある有名な甘酒屋「天竺屋」の熱い甘酒を啜りながら一服する。

はち切れる袋に覗く破魔矢かな

初空や漫画的な大黒像

あ・うんする狛犬達や去年今年

素山

周二

由利

神田明神の御利益は色々ある。徳川家康が関ヶ原の合戦に臨む際に戦勝祈願を行ったことから勝利祈願、勝負事だけでなく学業成就の祈願でも受験生に人気がある。そして商談成立の仕事の守り神ともなる、当日もサラリーマンが初詣での長い列を作っていた。また、縁結びの神様としても有名である、要は庶民の願いをすべて叶えてくれる便利な神社なのだ。その氏子は大手町、丸の内から日本橋や秋葉原など日本経済の中枢をなす百八町の個人や企業が中心となっている。

祭礼としては、五月に行われる神田祭りは日本三大祭りの一つとして特に有名だが、一月一日の歳旦祭、六月末の夏越の茅の輪潜り、九月の将門塚例祭など年間を通じて四十以上の祭礼が行われている。祭り好きの江戸っ子気質がここにも現れている。参詣する人びとの心意気と氏子の協力でお祭りを末永く継承してほしい。

松過ぎし正装の人混む社

日当たりてみくじの花や初社

和わぐ風赤き袋の初みくじ

陽子

京子

清秀

当日は青空が綺麗に澄み渡る晴天、流石に吹き抜ける風は冷たいものの、絶好の吟行日和だった。神田明神の

見所は権現作りの豪華な社殿、祭祀殿に展示されている
神田祭に関する資料や神寶、撰末社の一つの古い江戸神
社、魚河岸の水神社など境内に沢山にある。また、銭形
平次の銭形の碑と隣に寄りそう八五郎の小さな石碑も見
逃せない。当日、境内では日光猿軍団のミライちゃんの
猿回しの余興が行われており見物の人びとに大受けで
あった。猿の愛らしく愛嬌のある仕草は見るひとの心を
和ませてくれる。

ご祝儀を笊で集むる猿回し

猿回し猿と息合う男前

境内に紅ほんのりと冬の梅

正規

皓一

礼子

神田明神の近くには湯島聖堂が有る。今回は寄らな
かったが湯島聖堂は火災に幾度か遇い江戸時代から残っ
ているのは入徳門とその左右の塀と水屋のみだそうだ。
聖堂の入口近くには孔子の立派な銅像が建立されてお
り、また、大成殿の屋根の魔除けの鬼状頭と鬼龍子は、
その恐ろしい風貌から何か曰わくがありそうだ。さらに
お茶の水駅周辺の神田の街は、楽器店や古本屋が多くあ
り昭和の薫りが漂う、これも興味をそそられる。掘り出
し物を求めてゆつくり散策するのも一興かも、青空に照
るニコライ堂の丸いドームも美しく異国情緒がある。又

の機会に是非訪れたい。

冬ぬくし聖堂超ゆる飛行機雲

楽器店多き町並み春隣

紀政

さち子

昼食は「神田餃子」で日本一と評判の餃子を美味しく
頂き、満腹状態で今回の句会場に向かう。会場の「銀
漢」のオーナーは俳句結社の主催をされておりご配慮頂
いた。

無事に本年初の吟行会は、いつもの様に和気藹々と楽
しく行われた。神田明神の御利益で今年一年の幸多きこ
とと俳句の更なる上達を祈りたい。

■かさね吟行会■

日時 二〇一九年三月八日（金）

場所 目黒「庭園美術館」

集合 庭園美術館 十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（八三）

丸山 酔宵子

『神田神保町界隈』

年末の神田神保町界隈、軒を連ねる古本屋の軒先に詰まれた古本を物色している本好きが寒空に首をすくめて覗いている。神保町には三省堂、岩波書店や集英社等がある文化の香りの高い街である。半世紀ほど前、新卒で務めた外資系広告代理店が小学館にあり、三ッ揃い濃紺スーツをピシーっと着こんで、一端（いっぱし）のアドマン気取りでブリブリと突っ張っていた。時は「猛烈からビューティフルへ」連日の残業で、終わればやれ六本木だ赤坂と、神保町周辺で夕刻からゆっくり飲むことはなかった。

しかし近くには個性豊かな老舗「餃子のおけい」「出雲そば」「揚子江」などがあり、「ランチョン」などは昼間から唐揚げと100円ランチョンビールで、横を見るに吉田茂の放蕩息子英文学者吉田健一が紺色の背広を着

て美味しそうにビールを飲んでいた。

そんな懐かしい神保町交差点にある老舗映画のメッカ岩波ホールにインド映画「ガンジスに還る」を観に行った。岩波ホールは1968年映画文化の衰退に危機感を持った総支配人高野悦子が、質の高い映画を上映し日本で初めて完全定員入れ替え制を実施した映画館である。

雄大なガンジス河を背景に、誰にでもいつか訪れる「死」というテーマをユーモアと人情味を交えて描いたベネチア国際映画祭で大絶賛されたインドの新鋭シュバシシュ・ブティア監督の感動作。重たいテーマであるが何故か心地よさとともに岩波ホールを出れば、冬の日とはとっぷり暮れて熱燗が恋しくなってくる。

岩波ホールに来るたびに立ち寄るのは、三省堂裏手にある『兵六』である。鹿児島生まれの初代平山一郎が戦後上海から無一文で引き揚げ開店。多くの文士たちに愛され、煤けた壁には林芙美子、高村光太郎、坪井繁治の色紙が何気なく飾ってある。

平山自身のルーツである鹿児島のマインドを色濃く打ち出して、質実剛健な気風を店に持ち込もうと、郷土の

酒である芋の本格焼酎と料理は、子どもの頃から慣れ親しんだ薩摩料理そして上海時代に覚えた本格的な中国料理。茲に、平山一郎の居酒屋「兵六」創業の心意気ともいえる兵六憲法がある。

一、居酒屋兵六に於いては店の女がお客にお酌する事を厳禁す。

一、葷酒山門に入るを許さずとは反対に、居酒屋兵六の山門内ではアルコール抜き飲物は一切売るを許さず。

一、宣伝広告は必要止むを得ざるもの以外厳に慎む様心掛ける事。

一、兵六店内の大掃除は遠慮す可き事。

一、清酒は地酒の二級酒に限り特級や一級酒は絶対に置かぬ事。

一、洋酒、泡盛等は御遠慮申上げる事。

一、日本の代表的な酒である蒸留酒の焼酎を皆に再評価して頂く様大いに宣伝する事。

年季の入った提灯が木枯らしに揺れている。縄のれんをくぐればもうほぼ満席。先ずここでは小さな薬缶に入った白湯で、ゆつたりと自分好みの濃さで嗜（たしな）む芋焼酎薩摩無双が極上の旨さ。

木枯らしが格子戸叩く縄のれん

酔宵子

楽しい時間 76

山本紀久雄

2019年1月31日

神にならなかつた鉄舟・・・その六

海舟夫婦の墓が洗足池にあり、昭和49年（1974）2月2日に大田区指定文化財となつたことと、妻・民子の墓が当初は青山墓地に葬られていて、洗足池に移された件を、大田区郷土博物館に尋ねると「詳しくは分からないが昭和20年頃に青山から移された」という回答であつたことは前号でお伝えした。

これに触れているのが『をんな千一夜 第18話 勝民子「女道楽」勝海舟の正妻 石井妙子』選択2018年9月号である。《勝の正妻はお民。砥目屋という薪間屋兼質屋の娘であつたが、一時は深川で芸者をしていたともいわれる女性だ。

結婚した時、勝は二十三歳、お民は二歳年上。当時の勝はまだ幕府に取り立てられる前で、自宅で翻訳や蘭学教授をする貧乏生活を送っていた。天井さえ薪にしてしまい、雨露も防げないという悲惨な状況だったが、それでも気丈なお民は、夢子、孝子、長男の小鹿を産み、必死で生活を切り盛りした。

結婚から十年後、意見書が取り入れられ、勝は長崎の海軍伝習所に赴任。運に恵まれ始めると途端に、彼の女道楽が始まつた。長崎では梶玖磨（お久）という年若い未亡人と関係して子どもを作り、これを引き取ると、お民に育てさせている。

米国から帰国し、赤坂に邸を構えてからは、ますますひどい。家の女中や、手伝いに来た女性たちに次々と手を出した。お糸、

お米、おかね、おとよ・・・。

妻妾同居を実践し、生れた子どもはすべて正妻であるお民が自分の子として育て、生みの母はそのまま女中として働き続ける。お民の心中も複雑だったろうが、生みの母も辛い思いをしたのではないか。

それなのに勝は、「俺と関係した女が一緒に家で暮らしても波風が立たないのは女房が偉いから」などと、呑気に語っている。女の心を理解していなかつたのか、あるいは、そうやって褒めておけば「波風が立たない」と甘く見ていたのか。しかし、正妻お民の本心は勝の死後、明らかになる。

勝が七十五年の生涯を閉じたのは、明治三十二（1899）年。お民はその六年後に、この世を去るのだが、「夫の隣だけは嫌。小鹿の隣に埋葬してくれ」と、きっぱり言い残すのである。

小鹿はお民が生んだ長男で、たつた二人の跡取り息子であつた。米国のラトガース大学に留学、さらにアナポリス（海軍兵学校）を卒業して帰国し、日本海軍に迎えられた。勝夫妻にとつては自慢の息子であつたが、残念なことに身体が弱く、明治二十五年に三十九歳の若さで両親を残して逝つた。

そのため、やむなく勝は小鹿の長女である伊代子に、徳川慶喜の十男の精を婿として迎え勝家の家督を継がせている。以後、「勝」姓を名乗るのは、この直系の子孫だけで妾腹の子孫は誰ひとり「勝」姓を継いではない。そのけじめは、はっきりとしていたようだ。

お民は遺言どおりに、夫の隣ではなく早世した息子の隣に埋葬されたものの、昭和二十八年、子孫の手により、夫の隣に墓石が移されている。墓下で何を思うか？

墨田区のホームページに《勝海舟は幕末と明治の激動期に、世界の中の日本の進路を洞察し、卓越した見識と献身的行動で海国日本の基礎を築き、多くの人材を育成しました。西郷隆盛との会談によつて江戸城の無血開城をとりきめた海舟は、江戸を戦禍から救い、今日の東京都発展と近代日本の平和的軌道を敷設した英雄であります》と述べられているが、家庭内では妻妾同居を実践し、生れた子どもはすべて正妻であるお民が自分の子として育て、生みの母はそのまま女中として働かせ続ける。

今の道徳観念からは大問題、明治時代でも稀なる事例ではなかったろうかと思つたが、榎本武揚も同じであつたと日刊紙『萬朝報』の記事が伝えている。

『萬朝報』は記者・翻訳家・作家として活躍した黒岩涙香が主宰し、スキヤダルの暴露などを売り物にしたことで知られる新聞だが、ここで明治31年（1898）7月から9月にかけて連載した「弊風^{（一）} 蓄妾の実例」、つまり、妾を囲つている男性の実例を500例以上取り上げている。この500例のうち華族が44例あり、その中に榎本武揚が、海舟と同様の妻妾同居を実践していると取り上げられている。（『明治のお嬢さま』黒岩比佐子著 角川選書）

『子爵榎本武揚 向嶋須崎町の自邸に木村かく（三十）松崎まさ（二十九）という二人の妾あり。いずれも夫人存生の頃より女中に来ししものなり』

海舟と榎本、共通するのは幕末の江戸幕府を支え活躍した旗本でありながら、維新後は新政府で要職に就いたことから福澤諭吉の「瘠我慢の説」で痛烈に批判されたことで知られて

いるが、妻妾同居の実践者という点でも共通していたわけである。

では、鉄舟はどうであつたのか。鉄舟に「^{（二）} 権妻^{（一）}」がいたと述べるのが『山岡鐵舟の妾』（鈴木氏亨著 文芸春秋1993年11月号）で、権妻の「おせん」の言葉として語らせている。

《どうして私が、山岡さんの妾になつたかと仰つしやるのですか？ ほ……。その頃は権妻はやりで、権妻の一人や二人を置かないと肩身が狭くなる御時世でした。勝（海舟）さんも、小仲さんと云ふ、私どもの朋輩の、柳橋に出ていた藝妓^{（三）}を落籍して、囲つておられました》

海舟にも権妻がいたとある。ということは自宅で妻妾同居、加えて別宅に権妻がいたわけである。では、この権妻とは何か。明治3年（1870年）に制定された『新律綱領^{（四）}』で、これは江戸幕府や中国の刑法典をもとにして、明治政府のもとで作成された最初の刑法典であり、身分制度など様々な事が定められたもの。この中で、妻と妾を持つことが公認され、この妾は権妻と呼ばれ、夫から見ても、妻と妾が同等の二親等として記載されていた。

だが、妾をめぐる議論が持ち上がる。その背景には、西洋から入ってきた「夫一妻制や男女同権論があつた。それまで日本人は、地位や財力がある男性が妾をもつことを当然のように思つていたが、西洋人はそれを奇異に感じるらしいと知つて、慌て始めたのである。

その後、1880年（明治13年）の刑法の制定に当たつて、「妾」という文字がようやく戸籍から削除されることになった。

絹の話(100)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

奄美大島 泥染紀行

奄美の空気

飛行機が羽田から一直線に奄美の飛行場に着陸して、飛行機ドアを一步出たとたん、奄美の何とも言えない、柔らかくて少し甘い様な空気に包まれました。

かつて、ハワイを訪れた時に感じたとき空気の味を瞬時に思い出しました。

これを味わえるのはほんの2、3呼吸の僅かな間だけです。昔、潜水艦の浮上時の空気の美味さを語ったコラムを読んだ事がありますが、まさにこの事かと納得しました。美味しい空気は人の気持ちを穏やかにしてくれます。絹を通る空気を呼吸すると、イライラが和らいで、穏やかな気持ちになると似ています。

物づくりには空気が大切です。奄美の空気の中で伝統の泥染めに取り組んでみようと思ってやって来しました。勿論、伝統工芸に簡単に取り組ませて頂くのですから、

我々も空気ばかりでなく、島全体の見聞を広めなければなりません。高い岡に上がって島形状を眺め、途中の色々な植物に触れ、島の歴史なども少しく学び、気持ちの準備がやっと整って来しました。

奄美のご馳走

奄美の人になるには何といっても奄美の食べ物を食べる事が一番です。

三線名手（NHKのど

自慢民謡の部で優勝）の居酒屋で、奄美の三線の音を聞きながら、奄美の焼酎、野菜料理、刺身、赤魚の唐揚げなどを食べましたが、宴半ばから私達が太鼓で拍子をとって、酒がまわる頃、皆立ち上がって、手を上に上げエイサーを踊り、奄美の空気を充分体の中にしみこませました。これで伝統工芸に向き合う心身が整ったように思いました。



奄美大島から喜界が島方面を望む

奄美の泥染

奄美地方に泥染め技法が伝わったのは14世紀中国(元)からと言われています。

中国の清朝時代の映画などに出て来る一条弁髪(ひとえ)の着ている黒衣は、昨今、日本で売られている中国製の泥染と生地(じぢ)の風合い、黒光りがそっくりです。

現在の泥大島は昭和30年代頃より戦後復興の代名詞のように大ブームがわき起こり、日本の着物文化を支えました。しかし現在は落ち着いて、街にかつての喧騒はないうです。

奄美大島でも琉球多蚕繭(たさん)の様な在来種の養蚕(やうさん)がありました。糸(いと)の供給(きゅうきやう)を主に支えたのが、玉繭加工(たま繭かこう)の産地豊橋(とよはし)で、今日でもその流れは続いています。

古来から、生糸(なまいと)で作る絹衣(きぬえ)は支配階級(しはいかいきやう)の物とされて来ましたが、紬(ちゅう)、絹紡糸(きんぼういと)で作られる絹衣(きぬえ)は庶民(しよみん)に



泥染公園の泥田で泥染する参加者

着用(しやうよう)が許(ゆる)されていました。

大島紬(おおしまちゅう)とは庶民(しよみん)の物であつたので、一気に全国(ぜんこく)に広(ひろ)まったと言えます(いえます)。

奄美(あまみ)の島々(しまづ)には蘇鉄(そてつ)の木(き)が沢山(たくさん)茂(も)つていて、蘇鉄(そてつ)は鉄分(てつぶん)を多く含(こ)むので、田畑(でんはたけ)の土壌(どじやう)は鉄分(てつぶん)が多い(おおい)のです。その泥田(でんでん)を使(つか)つて、鉄分(てつぶん)を生地(じぢ)に付(つ)けるのが泥大島(でんおおしま)です。しかし生地(じぢ)(絹(きぬ)、綿(わた)など)をいきなり泥田(でんでん)に浸(ひた)しても黒い泥色(でんじき)に染(ぞ)まつてくれません。泥(でん)の鉄分(てつぶん)を吸着(しやくしやく)させる為(ため)にシャリンバイ(イチイギ) (奄美(あまみ)の山野(さんや)に多く自生(じせい)、成長(せいちょう)は遅(おそ)いが大木(おおき)もある)を細(こ)かく切り碎(くだ)いて煮出(にで)した染液(ぞんえき)に漬(ひた)け、エンジ赤(あか)に染(ぞ)めます。泥田(でんでん)とシャリンバイ染(しやりんばいぞん)めの行程(ぎやうてい)を何度(なんど)も繰(くり)返し(さい) (最高(さいこう)36回) 染(ぞ)め重(おも)ねます。また仕上(しじやう)げの水(みづ)洗い(あらい)も30回(さんじゅうかい)以上(いじやう)になる大変(たいへん)な作業(さぎやう)です。



泥大島の織物場 奄美夢織の郷

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年1月28日

ふらっと外へ

空気が冷たく

風が強い

インフルエンザが

猛威を振るう環境ですね

でも

こんな日は

空が本当に綺麗ですよ

青空が透き通るくらいで

冷え切った身体には

お天道様が本当にありがたいですよ

そこで

お天道様をあびる

これは身体の免疫力をあげるんです

15分位浴びると良い

といいますが

意外と浴びてなかったりしますよね

休憩中やちよつと時間があるときは

お天道様を浴びに

気分転換も兼てふらっと

出かけてみてはいかがでしょう？

2019年2月1日

恵みの雨

昨日の夜の久々の雨は

とめどなく降り

まさに恵みの雨となりましたね

朝 窓を開けた時

風が冷たいですが

潤いを感じホッとしました

この湿度で気温が少し上がれば

インフルエンザも落ち着きますよね

朝起きぬけの咳

喉の痛み

1日熱

が流行ってます

インフルエンザに似ていますが

風邪で病院に診察に行くのは

院内感染のリスクが高いですよ

難しいところです

いつもと違う身体の違和感

というのがおおざっぱではありますが

一つの指標としては

分かりやすいかもしれません

引き続き

睡眠

水分

身体を温める(湯船 ゆたぽん)

で身体を守って行きましょう

「江上浩二の独り言」 15 江上浩二

1ドルコイン

大学院1年（1976年）の夏、初めて米国に旅行に行った。42年前を振り返ることになってしまった。お金が無かったので、夏はアルバイトをしてお金を貯めてから、大学の夏休みの終わりがごろ日本を発ち、2週間して9月に入って東京へ戻ってきた。

当時は米1ドルが280円前後と記憶していて、ドル札両替も銀行でパスポートの後ろの方のページに何ドル両替と記録された。バイトで稼いだお金と航空券購入の残金など合わせて、500ドル位両替した。これからケチケチ旅行が始まったのであるが、ちよつと変わった事とは帰国した際に大きな米国1ドルコイン2つがズボンのポケットに入っていたことであった。

旅行の道中記録も詳しく書きたいところであるが、それは別の機会とするが、どこをたどったかは、左に示す。
羽田空港↓／ホノルル（ハワイ）／ロサンゼルス／デン

バー／フォートコリンズ／ラミィ／イエローストーン公園／シャイアン／アルバカーキー／コロラド溪谷／ロサンゼルス（デズニールランド、アナハイム）／ホノルル／ハワイ島（ヒロ、コナ）／ホノルル／↓羽田空港

この道中で沢山の経験をし、色々な方のお世話になり無事に帰国したわけであるが、この1ドルコインに絞って話をしたい。

当時は米国西海岸へは一旦ホノルル経由の飛行機となる。しかし、このホノルルがキーワードとなり、単なる経由地ではなく、私の父方の叔母さん（姉）の家族が住んでおり、帰りに会うことも目的だった。今もそうであるが、米国のコインはクォーター（25セント）が一般的で、当時大きな1ドルコインなども知らず、1、5、10、20ドル札で十分であった。

結論を先に明かしてしまうと、普通の米国人でも当時、入手は簡単でなく、ホノルルの郊外、パールハーバー（真珠湾）を見渡せる小高い処に住む叔母さんがやつとのことで手に入れ、私と兄の分2枚を土産として贈ってくれたのである。本当に色々な土産の中で今でも残っている

唯一のものである。結婚し、自宅を離れ、大きな1ドルコイン1枚が常に私と共に、散逸、迷うこともなく42年間連れ添ってきているのである。

もう、かなり前に亡くなった大正一桁生まれの叔母は、このコインはラスベガスのカジノで使うために作られ、そこでだけでしか流通していないような話をしてくれたことを覚えている。調べると本当だ。後年仕事で訪米し、ついでにラスベガスや近郊のカジノを覗いたが、まだ直接現金コインをスロットマシンみたいなものに入れる機械が残っていた。その時でも大型の1ドルコインを差し込むものは見当たらず、クォーターだけの機械だった。余談ではあるが、同行した米国人の友人がクォーターのスロットで当たりにして、じゃらじゃら一山の25セントコインをゲットした時、1ドルなら金額が同じでも量は減らせるなど感じた次第である。

この約40年の間に、日本円が円高となり、米ドルがドル安となる訳だが、円が1ドル79円ゾーンまで高くなっていた時もあり、最近では110-114円ゾーンで安定している。当時500ドルだった携行していた金額は計算上1772ドルにもなった時もあったが、泡銭という言葉

がぴったりのようだ。細かな話であるが、ケチケチ旅行で最後のホノルルの買い物で、当時の日本円で数万円もするような、ドイツ・アデタス製、ブルーのバックスキンのランニングシューズを80ドル程度で購入し（そのためにドル現金を使わないように残しておいた）、履いていた古いシューズを捨て、新しいものに履き替えて土産として帰国した。今となつては笑い話になるようだが、40年以上前でもハワイのコナコーヒーはあって、土産として買ったのだが、ハワイの叔母にコナコーヒーは有名でもなく、味も普通のものだと言われたことが鮮明に覚えていた。昨今コナコーヒーは有名となり、価格も高く、何が変わったのか、私は定かでない。

漢詩研修（二十九）

千代田岳精会 平井茂行

甲斐の客中

荻生徂徠

甲陽の美酒緑葡萄

霜露三更客袍を湿す

須識良宵天下に少なるぞ

芙蓉峰上一輪高し

甲陽美酒緑葡萄

霜露三更濕客袍

須識良宵天下少

芙蓉峰上一輪高

【作者】

荻生徂徠《寛文六年（二六六）～享保十三年（七二八）》江戸時代中期の儒学者 思想家 文献学者。徂徠は号。姓は物部（もののべ）、荻生氏である。寛文六年二月、江戸の二番町（＝芝浦）生まれ。日本橋茅場町に私邸を持つことから「けん園」「茅場」の中国風表記）とも号した。先祖は三河（愛知県）の荻生の人。物部守屋の子孫であるから、荻生を氏とし物部を姓とする。後に徂徠は物氏とし、物徂徠、物茂卿と称した。祖父 玄甫のとき、江戸に来て医を業とした。父は五代將軍 徳川綱吉の侍医 荻生篤（二説に景明） 弟は八代將軍吉宗の侍医で明律研究で知られた荻生北溪。

元禄五年（二六九）父の赦免で共に江戸に戻り、芝増上寺の門前に住んで学に励み、私塾を開いたが、家計は貧しく、衣食にもこと欠く状態であった。このとき近所の豆腐店の主人が、毎日、豆腐糟（おから）を贈ってくれたことに感謝し後に幕府に仕えるようになってからその恩返しをした。そのうちに増上寺の山主の周旋で將軍綱吉の側近で側用人 柳沢吉保に仕え名聲はあがり、將軍綱吉もしばしば吉保邸に臨んで徂徠の講義を聴いた。

柳沢吉保や八代將軍 徳川吉宗への良き政治的助言者でもあった。吉宗に提出した政治改革論「政談」には、徂徠の政治思想が具体的に示されている。これは、日本思想史の流れのなかで政治と宗教道徳の分離を推し進める画期的な著作でもあり、このち経世思想（経世論 経世済民論）が生まれてくる。兵法にも詳しく「孫子国字解」を残した。卓越した「孫子」の注釈書と言われている。彼の政治経済論は太宰春台に、文学面は服部南郭に受け継がれたとされる。著書はきわめて多く三十六部九巻に達し「弁道」「弁名」「訳文筌蹄」「論語徴」「学庸解」「読荀子」「読韓非子」「政談」「太平策」「南留別志」があり、詩文集としては「徂徠集」三十一巻「拾遺」一巻などがある。享保十三年正月に六十三歳で没した。墓所は港区三田の長松寺。

【解説】

甲斐（山梨県）に遊び、その名産「葡萄酒」を飲み、名峰「富士」を眺めて、その感懷を詠った詩。

『芭蕉翁伝』 蓑笠庵梨一 『奥細道菅菰抄』 より 中屋保之

祖翁は、伊賀国柘植郷の産にして、弥兵衛宗清が末裔。（柘植郷に宗清宅地の跡ありと云）兄は、松尾半左衛門と云、翁は次男にて、（正保元年に生る）初の名は半七、後に忠左衛門宗房と改む。（世々の実名、元祖宗清の清の字を取と云。按ずるに、延宝以前の俳書には、多く名を宗房としする。桃青と云しは、東都下向の後なるべし）国主藤堂家の同姓同国上野、城土藤堂新七郎良精の臣となり、夫より嫡子主計良忠（俳名蟬吟）へ随仕す。蟬吟子は、洛の季吟に俳諧を学び申さる。故に翁もともに其門に入て、

いぬとさるの世の中よかれ酉の年

と発句ありしは、十四歳の時なりとぞ。（明暦三年なり）然るに蟬吟子は、不幸にして寛文六年の四月、世を早ふし給ふ。故に翁は、君臣の因、風雅の縁、一かたならぬ歎のあまり、遺骨を負て高野山に登り、報恩院に納て、六月帰国。其後ひそかに遁世の志ありてや、二君に仕ざるよしを告、しきりに暇を乞申されしを、あへてゆるしなかりし故に、其秋ならむ、同僚城孫大夫といふものの門に、短冊を粘して、

雲とへだつ友かや雁の生わかれ

と一句を残し、国を去て（此時年二十三と云）都にのぼり、季吟師のもとに遊学し、其後東武へ下向ありて、（梨一かつて東都にあそぶ間、本船町のうち、八軒町といふ処の長卜尺と云俳士に交る事あり。彼者語りけるは、我父も、卜尺を俳名として、其比は世にしる人もありき。一とせ都へのぼりし時に、芭蕉翁に出会て東武へ伴ひ下り、しばしがほどのたつきにと、縁を求て水方の官吏とせしに、風人の習ひ、俗事にうとく、其任に勝へざる故に、やがて職をすてて、深川といふ所に隠れ、俳諧をもて世の業となし申されしと、父が物語を聞ぬと。（此時延宝六年にて、年二十三と云）あるひは一説に本船町の長序令といふ者にさそはれて下り給ふとも云。卜尺序令、ともに古き俳集にみえたり。或は兩名同人か）深川の六軒堀といふ処にいほりをまうけ、天和二年まで在住ありしに、（此間七ヶ年、年三十九）其冬回禄の災にあひて、しばらく甲州に赴き、彼国にて年をこえ、翌三年夏の末なら

はせを野分して鹽に雨をきく夜哉

の吟あり。此句よりして、住所を芭蕉庵と名づけ、人々もはせをの翁とは称じけるとぞ。翌年改元ありて貞享と云。此秋江

都を旅立し、美濃・尾張より、（此時年四十一、故に美濃にて、薄に霜の髭四十一と云脇句あり）伊勢路を経て、故郷の上野に年籠し、翌貞享二年の春も、猶大和・なには・京師など経行し（野ざらし紀行是なり）此夏又深川へ立帰り、同四年の秋まで住申され、（此間にかしき紀行あり）この冬再び上つたへ首途有。（笈小文紀行是也。時に年四十四）次の年又元を改めて元禄と号す。此年の八月末か東武へ帰り、翌二年の春、北国行脚に赴給ふ。（奥細道紀行是なり。時に年四十六）それより美濃・尾張・伊勢路をへて、大津に年をこえ、翌三年の夏、石山のをくに、幻住庵をむすび、四年の秋までここに隠れ、（此間に嵯峨日記あり）此秋此庵を出て、東武に下り、同七年の秋（東都庵住三ヶ年）また東都を旅立、東海道を経て、石山の幻住庵にしばらくやすらひ、京師などへ往来ありて、それより故郷伊賀へ立こへ、奈良を経て、難波に逗留あるうちに、病に犯され、十月十二日に世を去給ふ。（年五十一なり。此時の旅宿は、大坂御堂前花屋仁左衛門と云者の借屋にて、其地主の家今猶存す）遺骸は、江州松本の義仲寺に葬る。（此病中より終焉までの事は、其角が編る枯尾花集、支考が笈日記等に見えたる。故にここに記さず）

右伝記は、伊賀上野の俳士、桐雨の筆記（桐雨は猿雖の曾孫にて、猿雖は翁の門人なり）加賀若杉の僧、既白房の覚書を併せて、是をしるす。

芭蕉師を翁と称する事は、去來の旅寢論に、むかし其角、我に語けるは、今度都に來り、師の名の高き事をいよいよ知侍りぬ。同門の人々、師を尊みて翁といふのみにあらず。他門の人、我に向て翁翁と称す。まして季吟は師の師なり。其子の湖春を先として、をきなと云り。然れば門人のほかるべき事にあらず。かさねて集を出さんには、翁と書べしといへりと有。く按ずるに、祖翁の古俳集に、武藏曲と云あり。序は季吟の撰にて、其詞に云、

今はむかし、逍遙遊のおきなといふものあり。細河のながれに和歌水をくみながら、老のさゝ波高なみをこえて、滑稽の島にせうえうして、つゐに其しまりとなりぬ。予ちなみに島ぶりをとふに、おきなこたえていはく、此しまは世界のまんなかなれば、あまりに上手過るをきらへり。下略

蕉師を翁と称する事は、あるひは此序文の詞にまじまる成べし。時は天和二年にて、祖翁の春秋いまだ四十歳に満ず。さるを此号を得給ふは、仰高の大徳いよいよたふとむべし。

伝記 畢

『奥細道昔菰抄』の著者蓑笠庵梨一（一七二四～一七八三）

母方の姓高橋氏を名乗る。武藏国児玉（現在の本庄市児玉町）出身。江戸中期の芭蕉研究家。『奥の細道』の厳密な注釈をした研究者

として知られ、今日でもその成果はよく参照されている。梨一は、奥の細道を実際に自分でも歩き、古今東西の文献を渉獵して、偉業を成した。芭蕉の門弟以外で最も優れた芭蕉研究家の一人とされる。

《参考資料》 国立国会図書館デジタルコレクション 芭蕉俳句全集他》

沼津での牧水ゆかりの地を巡って（二）

沼津 鈴木孝雄

アララギ派の歌人には、牧水はあまり評価されていない。例えば、斎藤茂吉は「歌論三、牧水の歌二首」で、厳しく論評している。本稿は沼津の牧水ゆかり地の観光案内として、参考になればと願っている。

若山牧水（明治一八年～昭和三年）は、東京での生活に心身共に疲れはて、大正九年八月暫くの療養のため、香貫山西麓の楊原村上香貫折坂（現在の沼津市本郷町八一五、ロイヤル本郷マンションが建っている所）に移り住んだ（図一の①）。家は古屋だが六～七部屋の借家、敷地面積六〇〇坪あまり、桜の木々に囲まれた大きな屋敷であった。前には内膳堀という農業用水が流れ、北に田圃を通って二〇〇m歩けば狩野川の黒瀬が眺められた。海拔は約七m、北北西には愛鷹山そして富士山、北東に箱根山、東に香貫山（一九三m）が望める景観に恵

まれた地。沼津駅から約二km、田舎とはいえ、近くに郵便局や商店もあり、生活に便利な所であった。

環境に恵まれたこの地で次第に健康を回復する。長男の旅人とともに香貫山にしばしば登り、歌を詠んでいる。

海みると登る香貫の低山の

小松が原ゆ富士のよく見ゆ

低山の香貫に登り真上にし

そびゆる富士を見つつ時経ぬ

香貫山いただきに来て吾子とあそび

久しく居れば富士晴れにけり

三首目の歌の石碑は、香貫山中腹の香陵台に立っている。図二に、香貫山山頂近くの展望台から見た北側の眺望写真を示す。当時に比べ市街地の風景は変わってしまったが、愛鷹山・富士山は変わらず雄大に見えたであろう。

しかし、経済面は回復されず、一銭にも事欠く状態であつた。

抽匣の数の多さよ家のうち

かき探せども一銭もなし

三日ばかり帰らむ旅を思ひたちて

こころ燃ゆれどゆく銭のなき

沼津に引越してから富士山への関心は急速にふくらんでいった。大正一〇年三月に生まれた次男の名前を富士人と命名している位だ。

わが門ゆ眺むる富士はおほかたは

見つくしたれどいよよ飽かぬかも

(つづく)



図2 香貫山展望台から沼津市街・愛鷹山・富士山を望む

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

家があれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

家有者 筥爾盛飯乎 草枕 旅爾之有者 椎之葉爾盛(②一四二、有馬皇子)

(口訳) 家にあつては筥(正式の食器)に盛る飯を、今はこうした心にまかせぬ旅の途上であるので、椎の葉に盛つて食べることだ。

前歌に続いて出ている歌。この皇子の御歌は集中にこの二首のみであるが、いずれも切実な心情の詠まれた秀歌として残った。この歌も何の奇もなく述べられているが、その悲劇的な史実を背景としなくても、なお一脈の哀韻が歌の底に流れていることを見のがすことは出来ない。初句「家にあらば」の訓もあるが、ここは家にある時にはいつでもと既定の事実を断定的に言っている所だから「家にあれば」の方が適切である。この歌を道祖神への供御神饌として飯を椎の葉に盛るのだとする見解(山本健吉氏等)もある。

岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへりみむ

磐白乃 浜松之枝乎 引結 真幸有者 亦還見武(②一四一、有馬皇子)

(口訳) 岩代の浜の松の枝を引き結んで置いて、もしこの身が無事であつたならば、またここにやつて来て見よう。

有馬皇子は孝徳天皇の皇子。斉明天皇の四年十月、謀反の決意をされ、(実は蘇我赤兄に謀られて)その事露われて、紀伊に送られ、皇太子中大兄の訊問を受け、ついに御年十九の春秋に富む身を藤白坂(今、海南市の南から下津町の橋本へ越える山道を藤白峠と言っている。)に於て絞首の刑に処せられた。この歌は事露われて後、紀伊の牟婁の行宮へ護送される途中、岩代の海岸を通られた時の歌と推定される。松の枝を結ぶのは、当時、生きた草木を結ぶことによつて、身の幸福長生を祈願する信仰にもとづいている。異常な境涯に身を置いて、いさゝかの心の激動なく、かく淡々と平常の感を述べて居られる所に、却つて無限の真率切実な哀感がこもっている。そしてこの皇子の不幸な御最期がいかに世の同情を惹いたか、そしてこの作がいかに後人の涙を誘つたかは、その後多くの人によつて「結松を見る歌」が追和され、平安朝には歌枕としてうたわれていることによつても知られ、又先年は劇やテレビにさえ上演されたこともまだ記憶に新しい。茂吉は「かういふ万一の場合にのぞんでも、ただの主観の語を吐出すといふやうなことをせず。御自分をその儘素直にいひあらはされて、そして結句に「またかへり見む」といふ感慨の語を据ゑてある。これはおのづからの写生で、抒情詩としての態度はこれ以外には無いと謂つていいほどである」と言つているが、これは今日吾々が短歌を作る實際に当つても、十分に心すべき言葉でもあろう。

「歴代天皇御製歌」(九十七)

貫名海屋資料館

「昭和天皇」⑦

明治神宮鎮座五十年大祭

おほちのきみのあつき病の枕べに母とはべりしおもひでかなし

裏磐梯の宿にて

赤松の緑の中の宿ゆふべさわやかにみづばせう咲く

富士通(株)會津工場にて

いたつきもみせぬ少女らの精こむるこまかき仕事つくづくと見つ

平泉中尊寺にて

みちのくの昔の力しのびつつまばゆきまでの金色堂に佇^たつ

昭和四十六年(一九七二) 御年七十一歳

「カゴメウミヒドラ、クラトロゾーンウイルソニスペンサーに関する追補」「相模湾産貝類」御出版

三瓶山のふもとにて

春浅き林をゆけば白花のミヤマカタバミむれさきにほふ

伊勢神宮参拝

外つ國の旅やすらけくあらしめとけふは來ていのる五十鈴いすずの宮に
アラスカの空にそびえて白白しろしろとマッキンレーの山は雪のかがやく

昭和四十七年（一九七二年）七十二歳
「那須の植物誌」を御出版

伊豆須崎にて

谷かげの林の春は淺くして風藤葛ふうとうかずらの實のあかあかを見ゆ

マングローブの自生地（奄美大島）

汐のさす濱にしげれるメヒルギとオヒルギを見つ暖國に來て

ミュンヘン・オリンピック大會

朝も夕もドイツに競きそふ若人をテレビに見つつ思ひやるなり

（昭和四十八年―一九七三年―七十三歳）

子ども（歌會始御題）

氷る廣場すべる子どもらのとばしたる風船はゆくそらのはるかに

御津磯夫短歌鑑賞 15

「月虹」 鮫島 満

雪が降れば水が凍ればその上を滑り遊ぶはヒトのみならむ
『月下の華』 昭和五十八年

たとえば天気予報の表現は、それを聞く人のうちの多くの人の気持ちを含んでいるように思われる。

「昨夜から降り続けている雪は明日夕方まで止まない恐れがあります」「長梅雨とはいえ、今日は一日中晴れ間はないでしょう」「今夜は中国地方でも庭の水槽の水が凍る恐れがあります」。これらの表現は、雪や雨や凍結によって迷惑を受ける人に向かって言っている感じが強い。たとえば、「恐れがある」を「可能性がある」と言ってもそれは変わらない。

ところが、雪をひたすらに待っている人、雨が降らないと困ると心配している人などにとっては、「いよいよ雪ですよ」「雨はまだまだ降りますよ」というほどあからさまでなくても、そんな感じの言い方があってもいいはずである。

右の一首は、季節に応じた天候の恵みを受けてスキーやスケートなどを楽しむ人がいて、それは他の動物にはない行動であることを詠んでいる。作者の生活の場である愛知県三河地方では天候の異常がない限りにおいては冬ごとにスキーができるほどに雪が降り、スケートができるほどに水が凍ることはないと思われるから、かなり傍観的に見聞きしていることを歌にしたためたのである。

もちろん、冬山の温泉に猿が入ることがあるのだから、動物学の専門家に聞けば動物が雪や氷で滑って楽しむことが示されるかもしれないが、作者がそれほど厳密に詠もうなどと思っているはずはなく、ある時ふっと心を過ぎった思いを歌の形にしたのである。ただし、人の心理を読むことに長けた歌を得意とする人だから、これがそちらの方に発展する可能性を秘めていることは考えられる。

ただし、作者はこの翌年には次のように詠んでいる。

ヒトといふ生物ありて滑ることを楽しむ動物と定義せむとす
同五十九年

「氷魚」のことから (218) 岡本八千代

台湾は今、正月申（旧正月）。

かつての夫の友達（形象派支部長・副部長）から年賀を遠慮した手紙が届いた。黄欽安さんと邱俊雄さんからであった。お二人とも、西浦のわが家へ二泊されたことがあった。その時の事が書いてある私のノート出してみる。

○恰かも十三夜の月の夜であった。

○黄欽安さん、邱俊雄さんと夫と私の四人の語らい。持参された小さな湯呑みなどその他の茶道具等々。（今もわが家にある）それを使って。幾たびも呑み交し、語らいつつ時を忘れつつであった。

○その時、残された短歌……。

西浦の友情厚きわが友に別れを惜しむ達者にあれかし

黄欽安

西浦の十三夜の月を共に見る別れを惜しむ心と心

邱俊雄

かぐはしき台湾よりの高山茶交はしつづつ酔へるごとくに語らふ……黄さんへ

君と君とわれらのみほす高山茶秋の更け夜をさながらにして……邱さんへ

二人の方へ色紙に書いてさし上げた私。

語らいの中で邱さんが、「活在当下人無常」と言われた。その意味は、「現在生きている人はみな無常である」と。「無常」とは、はかないのではなくて、刻々と変化してゆくことで、また愉しくもある。……というところ方。

今から十七年前の思い出、つきない思い出。

さて、ここからは、やはり、ドナルド・キーン著。新井潤美訳の近代・現代篇7をたよりに書く。今回も啄木の歌を拾ってみる。

手初めに先づ富士山をくづさむと我いふ君ははれやかに笑む

Said the

first thing

I'd do

is smash MtFuji—

you laugh

り
よこれたる足袋穿く時の気味わるき思ひに似たる思出もあり

give me

the dreeps

sume memo ries

like putting on

啄木の歌、二首とも私は好きだ。今、私も三行詩に挑みたいという気持ちがある。自分の心が三行に別れるようで別れない。何とも言えない詩心が動き行替えができていると思う。そしてその中にみずみずしい啄木自身の心が動いているようだ。どうしたらそのような歌ができるのだろうか。

もう後のない自分を感じつつも、歌にかかわる一日一日を暮してゆこうと、思いつつ。

今回も次には何を書こうかとも思いつつ。

編集室だより【二〇一九年一月】

今泉 由利

○日本式のお正月を迎えるということ、私自身が主催することがなかったことに気付いた。父母の範囲であつたり、外国で過してしまつた長かつた時、招いていただいたお正月だつたり…。

ニューヨークの子達が、日本のお正月に帰ってくることになり、百パーセントの日本のお正月をしてあげたいとは思つたけれど、すぐ挫折した。「あなた達で好きなようにしなさい」ということになつてしまつた。

○どうしても築地の買物からはじめる…という子達に、ついて行く係にはなつた。豊洲に移つて無くなつてしまつた、どころではない、大変な人混み、行列、歩く隙間もない。

喜喜として、彼女達の正月づくりに励んでいる。これが一番良い方法だつたのだ。

○お正月三日から、石垣島で仕事がある、ということ、沖縄一週間の旅に出る。以前に行つた経験で、沖縄は暖かい…の発想だつたけれど、着いた那覇は寒かつた。

○首里城へ。

いつの間にか、琉球王国の城が、「行政空間」「祭祀空間」「生活・儀礼空間」と立派に美しく復元されていて目を見張る。まだ完成途上というけれど素晴らしい。

○琉球の江戸参府と、江戸時代、徳川將軍の代替り、琉球王の即位毎の江戸派遣。こんなすごいことがなされていたことを知る。琉球楽器を携え。歌や踊りが披露され…。徳川家慶の將軍就任を祝うため派遣された琉球使節の長い行列の錦絵。克明に使者達の顔だち。中国風の衣装、馬に乗る楽童子…こんなにみごとなものがあつたのですね。

○沖縄美ら海水族館

沖縄の海を再現した世界最大級の水槽をゆうゆうと居るジンベイザメ。ガラスを掠るほど近く何度も何度も私の方にきてくれる。その大きさと、落付きと、眼差しと…。いつまでも離れたくなかつた。

○石垣島へ。飛行機に乗つた。石垣島に着くなり、空気がおいしい。海が美しくてびっくり。車で石垣島中を案内して下さることになつていて、王様になつたみたいの旅。

砂糖きび畑、パイアの実がなり花が咲く木が道の辺にあり、よろこび度全開。放牧されている牛達。南国の植物達。島の生活が垣間見え…。移り住みたくなつてしまふ。

○石垣島の夜の真暗の山を登り天文台にゆく。雨雲厚く、何も見えないけれど、予習した星空は、私の心にみえていた。

○船に乗つて、竹富島にゆく。

ほんの少しは、牛に乗つたけれど、歩いて歩いて、サンゴの白砂の道を、島中歩いて、木にも草にも全部のものに、いちばん近寄つた。愛しいものが増えた。

野菜・まんだら (13) パパイア・papaya



雄花



雌花



- パパイアは、チチウリノキ科に属する果実。
- 草のようであり、木のようでもあり、常緑小木。
- 原産地は、熱帯アメリカで、大陸発見後すぐ、16世紀初めに、スペイン人、ポルトガル人により、世界の熱帯各地に広められた。
- 大変、原始的な植物で、雌木と雄木があり、雌木には雌花が咲き、雄木には雄花が咲く。両性木があり、雄木が成長するにしたがい、だんだん雌木になって、実を結ぶようになる。雄木の根を切ると、雌木となり、雌花が咲き実を結ぶ。
- パパインという、動物性タンパク質を柔らかくする酵素をもつ。若い果実ほどパパイン含有量が多い。
- 熟したパパイアはビタミンCが大変多い、ビタミンAも多い。ミネラルは、カルシウムと鉄があります。青い果実を切ったり、葉を折ると出てくる白い乳液は、たん白質分解酵素パパインを含みます。
- 固い肉にこの乳液をすり込んで1～2時間おくと、柔らかな肉になります。
- 熟したパパイアには酸味がないので、ライム・レモンなどを添えると、とてもおいしくなります。
- 沖縄には、琉球王朝時代に持ち込まれ、現在では野生化したものも多く、青い実は野菜として、サラダやいためものにし、漬物にもなっていました。熟したパパイアは、半分に切り、種をとり、レモン・シークワサをかけて、ラップして冷凍するとシャーベットが出来上がります。石垣島を車でゆく両サイドに、花咲き実がなるパパイアの木にいっぱい出会いうれしくなってしまう景色でした。

明治神宮春の大祭奉祝献詠歌募集要項

- 一、献詠歌 未発表の近詠（一人一首厳守）
紙 はがきに限り

献詠は楷書にて書き歴史的仮名遣を用いる（小・中・高校生は現代仮名遣）郵便番号・住所・氏名（ふりがなを付す）・電話番号・年齢を明記（小・中・高校生は、校名・学年も記すこと）

- 一、締切日 平成三十一年二月二十七日（水）必着
一、選者 秋葉四郎・木村雅子・内藤 明・松平盟子
（敬称略五十音順）

- 一、選歌発表 五月六日（月・振休）歌会当日 於明治神宮参集殿
一、賞 一般 特選 一〇名 記念品贈呈
入選 二〇名 記念品贈呈
佳作 一七〇名 記念品贈呈
若干名 記念品贈呈

- 一、送り先 小・中高校生 秀逸作 若干名 記念品贈呈
〒一五一八五五七渋谷区代々木神園町一一一
明治記念綜合歌会係 電話〇三三三七九一五五一

- 一、献詠歌奉奠告式

1日 時 五月六日（月・振休）午後零時三十分

2場 所 明治神宮御神前

- 一、第百四十回明治記念綜合短歌大会

1日 時 五月六日（月・振休）午後一時

2場 所 明治神宮参集殿

- 3歌会内容 入賞歌発表・表彰・選評

- 【講演】連続短歌講座《近現代歌人の家族詠 第三回》

「窪田空穂——人の親のかなき心」

講師 島田 修三氏

◎ 会費不要

☆来会者には作品集を贈呈致します。

☆作品集郵送ご希望の方は、切手三百円分同封の上お申込み下さい。

※特選・入選・佳作・秀逸作に入賞の方には短歌大会前に予めご通知致します

主催

明治記念綜合歌会
電話 〇三三三七九一五五一

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumi.yuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ケ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。